
見落とされた歴史について・死者たちの大地

(S.アレクシェービッチ、チェルノブイリの祈り、岩波書店、2004、24-37)

2017年9月29日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

チェルノブイリはすでに隠喩になり、シンボルになり、歴史にすらなつた。われわれは事実も数字も名前も全て知っているような気になっている。この本では、事故そのもののことでなく、チェルノブイリを取りまく世界のこと、我々が知らなかったこと、見落とされた歴史について、チェルノブイリという謎にふれた人々がどんな気持ちで何を感じたかということについて書かれている。筆者が3年間、原発の従業員、科学者、元党官僚、医学者、兵士、移住者、サマシヨールといった人々のもとを訪れては語り合い、記録したものである。

チェルノブイリとは大惨事以上のものである、と筆者は語る。本の中では、自分の体験したことを語る言葉が見つからない、どんな本でも映画でも見たことがない、聞いたことがない、といった告白がくりかえされる。前の世界はなくなり、今住む別の世界を理解するための考える方法も、体験も、視力や聴力、語彙すら持たない。知らないものから身を守ることが難しく、人々は忘れたがっている。チェルノブイリはまだ謎であり、新しい現実であると筆者は語っている。

第1章 死者たちの大地 人はなぜ過去をふりかえるのか

ピョートル・S 精神科医

なぜ、人々は過去をふりかえるのだろうか。それは、真実の再現でもなく、解放されて忘れてしまうためでもない。知識ではなく、人が自分自身についてめぐらせる憶測であり、感情にすぎない。

ピョートルは、自分の最も恐怖に満ちた体験は、子供時代の戦争の記憶である、と思っていた。茂みで女性が自殺しようとしているのを目撃し、道には殺された馬や人の死体がかがっていた。殺された父の姿も覚えている。しかしチェルノブイリの汚染地に何回もでかけて、そこで自分が無防備であることを理解した。過去はもう彼のことを守ってくれない。

話はできるよ、生きている者とも死んだ者とも

ジナイーダ・エフドキモブナ・コワレンカ サマシヨール

彼女は村の人がほとんどいなくなってから7年間、ひとりでくらしている。はじめのうちは村の人たちを待っていたが、今では死を待っていると言う。娘や息子は町にいる。

最初村に放射能があるといわれたとき、どんなものか分かっていなかった。説明を受けたが、彼女は村に転がっているかけらを見てセシウムのかげらと認識し、知ることができたためもう怖くないと主張している。警察や兵隊は、放射線の数値を記した立て札を立て、畑の野菜は食べない、薪やシート、カーテンなどを洗う、ガーゼマスクや手袋の着用を促し、村

に放射能についての演説を行った。井戸に錠をかけ、疎開を避難するよう促していた。しかし、彼女が、井戸の水は澄み、動物も沢山おり、花も咲き、母や夫、幼いころ亡くなった娘の眠る墓のあるその村からはなれることはなかった。今はネコと暮らしている。いつもはネコが話し相手である。たまに墓地に行った際には、そこで眠る夫や母、娘たちに話しかける。ひとりであるとき、悲しいとき、とても悲しいときにはどちらの声も聞こえる。彼女は目を閉じて村を歩き回りながら、彼らに話しかけるのである。

チェルノブイリ爆発事故

1986年4月、ウクライナ（旧ソ連）で起きた20世紀最悪といわれる原発事故。4号炉が動作実験中に制御不能となり爆発。ウクライナのほか、ベラルーシ、ロシアに放射性物質が降下し、原発半径30 km圏内が居住禁止区域となった。事故後、放射性物質の漏出を防ぐため、「石棺」と呼ばれるコンクリート製の構造物で原発を覆ったが、老朽化のため、新たなシェルターを建設中。原発の解体と、内部の放射性廃棄物の取り出しには数十年かかるとされる。